

文 化 財 学 習 会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 庵治の社寺巡り

講 師 渡辺 寧

(高松市文化財保護協会理事)

平成 2 3 年 1 1 月 2 7 日 (日)

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

1 庵治町の姿

庵治町は、四国本土最北端に位置し、三方をおだやかな瀬戸内海の海に囲まれています。

総面積の四十八パーセントを山地が占めていて、牟礼町との境界にそびえる五剣山（三七五メートル）を最高点にし、二〇〇メートル程の低い山々が並んでいます。

五剣山の西にある女体山には採石場が集中していて、今では石の採掘によって山肌はかなり露出しています。今日の石材業を発展させたのは、付近の細粒黒雲母花崗岩で、建築材のほか石碑、墓碑、石灯籠等の需要が多く、「庵治石」のブランド名で世界的に知られています。五剣山の北のニン坂峠から更に北へ、毘沙門山、竜王山、立石山の三山が三角形に並び、谷や尾根が地形を複雑にしながら、広い山地を形成しています。その先に、東西南北を見晴らす眺望の開けた遠見山、頂上に巨石を頂く大仙山、そして、海に面するなどらかな御殿山と続きます。これら庵治の山々は峰続きであり、それぞれが歴史や伝説に彩られています。

庵治半島の北部には、大小八つの島があり、このうち最大の大島には、国立療養所大島青松園があります。かつては人が住んでいた兜島、鎧島、高島、昔から無人島であった稲毛島の四島は明治四十年（一九〇七）に国から買い入れました。稲毛島は、ベストセラー小説『世界の中心で、愛を叫ぶ』の映画化の折、印象的なシーンのロケ

地として有名になりました。大島のそばには、石島、矢竹島、弁天島の小さな三つの島があります。これらの大小の島々が、庵治町の漁業もはぐくんできました。

庵治町の西には、源平の古戦場として名高い屋島があり、庵治には、船かくし、米はかり、墓標の松、鞍谷の鞍など、平家ゆかりの地名が今なお残っています。また、平家の墓だと信じられている古い五輪塔などが町内に残っています。昭和三十五年（一九六〇）四月に、大島の海岸の松の下から人骨とともに刀身が出土し、やはり平家の墓だったといわれたこともあります。

2 岩陰獅子 いわかげ

庵治で行われる獅子舞は、岩陰獅子といい、岩の陰から獅子が躍り出て舞う型のもです。鉦かねや太鼓の囃子にのって、勇ましく上下左右に動くのを特色としています。

獅子舞は、桜八幡神社の祭りに、才田、浜、谷地区のものが奉納されます。また、住吉神社の祭りでは、鎌野の獅子舞が奉納されます。どちらも、悪魔を払う先導役として渡御行列にも加わります。桜八幡神社の渡御では、各地区が同時に奉納するため、獅子舞の競演といった形になり、より一層活気づき勇壮な舞いが行われます。



大仙山から望んだ庵治の島々

※ 才田の獅子頭

〔平成十六年九月一日、庵治町（現在は高松市の）有形民俗文化財に指定〕

文政九年（一八二六）頃、彫刻師の額田喜左衛門ぬかたきざえもんが作った木彫りの

獅子頭です。江戸時代、喜左衛門は高松松平藩の大番屋敷にいて、丸門の主人として御殿を守り、瀬戸内海を航行する御用のお船を見張る役をしていました。木工彫刻に特にすぐれ、八栗寺、屋島寺の「びん

ずる尊者」、専休寺経堂にある維摩居士像などはこの人一代の大作とされています。

才田の獅子頭は、他の自治会の張り子の獅子頭とは重さが違い、力がないと扱えません。また、現在香川県下で祭礼に使用されている毛獅子の中で、最も古いものとされています。

3 桜八幡神社

ほむた

おうじん

たらしなかつひこ

ちゅうあい

おきながたらしひめのみこと

じんぐう

祭神 誉田天皇（応神天皇）、足仲彦天皇（仲哀天皇）、息長足姫命（神功皇后）、

たけのうちすくねおおおみ

武内宿彌大臣

主な建物 本殿、幣殿、拝殿、神門、神楽殿、宝殿、祓殿、絵馬殿、手水舎など。

また、伊勢神宮に向かっての遥拝所があります。



才田の獅子頭

〔『庵治町史』から〕

『香川県神社誌』（昭和十五年版）には、庵治には、郷社として桜八幡神社があり、その摂社と末社として一三の神社がある、とあります。

郷社とは、昭和二十年（一九四五）の終戦まであった神社の社格の一種で、うぶすながみ県社の下、村社の上に位置する神社であり、その地域の産土神（土地を守護してくれる神様）をまつる神社です。

（なお、摂社とは、本社に付属し、その祭神と縁故の深い神を祭った神社のことで、本社と末社の間に位し、本社の境内にあるものを境内摂社、境外にあるものを境外摂社といいます。）

桜八幡神社は、桜八幡宮、桜尾八幡宮、桜の宮とも呼ばれ、庵治を守護する神として、このはなさくやひめのみこと

木花咲耶比売命

（古くは佐久良尾命とも）
このはなさくやひめのみことを

祀っていました。木花咲耶比売命は、『古事記』などでは、神武天皇の曾祖母であり、木の花が満開したように美しい女神とされていて、近世には富士山の神様とされ、また桜の花の霊ともされました。桜八幡神社の創建年月ははっきりしていませんが、平



桜八幡神社

安時代初期の承和七年（八四〇）に、真言宗の僧真濟（八〇〇〜八六〇）が創祀したとも伝えられています。真濟は、弘法大師空海の高弟で、二十五歳の若さで阿闍梨の称号を得たという高僧です。『三代物語』には、桜八幡神社の創建について、次のように記されています。

—真濟は、初め山城国（現在の京都南部の地域）高尾山に住んでいた。平安時代初期の高僧、行基が作った十一面観音像が手に入ったとき、それを安置するにふさわしい土地を探した。承和六年、真濟が庵治浦に来て船に泊まったとき、八幡神の夢を見て周辺住民の寄進を募り、錢一万貫を集め、翌七年、蓮華山観音院万貫寺（のちに満願寺）を建立した。そして、京都に行って朝廷の許しを得た上で、「庵治一郷の社としてこれをまつる」と八幡宮を建て、八幡神を配祀した。—

満願寺は、桜八幡神社の社地にあつた寺で、明治初頭の神仏分離令によって廃寺となり、今はありません。



境内の神明型灯籠
（庵治石を使用した銘入りの石造物の中では最古のもの）

※ 大般若經（現在、願成寺が所蔵）

「『大般若波羅密多經』昭和五十七年一月十三日、庵治町（現在は高松市の）有形文化財書跡に指定」

南北朝時代の至徳元年（一二三四）、満願寺住職の教尊たちが願主となり、大般若經六〇〇巻の写經を始めました。一卷の平均は八〇〇〇字、十二人の協力を得て、三年がかりで六〇〇巻を写し終えるという大事業を成し遂げました。四一八巻に奥書があり、それを見ると三〇〇巻は教尊が写しています。

奥書には「山田郡奄治郷桜尾八幡宮」と書かれたものもあり、十四世紀の終わり頃に庵治があつたのは確かです。また、当時、桜八幡宮は桜尾八幡宮といわれていたことも分かります。後世、新しい紙に写經して補充したものの中に、「応仁元年（一四六七）十二月晦日夜社炎、正月満願寺失」とあり、三十日の夜に桜尾八幡宮が焼け、正月に満願寺もなくなったと推測されます。写經の奥書に登場する人たちの多くは分かりませんが、大野、十河、一宮、志度でも写經するなど、いろいろな土地が出ていて、庵治の人との交流が想像されます。
げんじょう

大般若經は、大乘仏教の經典を唐の玄奘（三蔵法師）が翻訳して集大成しています。何物にもとらわれない無執着の心で行動すれば、得ることも失うこともないといった「空」の理念を説いたもので、この真髓を短くまとめたのが「般若心經」です。大般



大般若經（大般若波羅密多經）
〔『庵治町史』から〕

若経は、奈良時代から尊重され、香川県には鎌倉時代に写経したものがありますが、完全なものはそろっておらず、六〇〇巻そろった大般若経は貴重です。

この六〇〇巻の大般若経は、現在、桜八幡神社の北西方向に位置する願成寺がんじょうじに、二の教箱に入れられて納められています。

※ つつじの太鼓（桜八幡神社）

「昭和五十九年八月二十七日、庵治町有形民俗文化財に指定」
安土桃山時代の文禄元年（一五九二）、豊臣秀吉が朝鮮出兵した文禄の役では、庵治の水夫たちが水先案内役や乗組員として出陣しました。出征の前に秀吉は庵治浦に船を泊め、桜八幡神社に戦勝を祈願したといえます。そして、文禄四年に凱旋すると、朝鮮から持ち帰ったつつじの大木で作らせた宮太鼓を奉納したとされています。今も宝物として伝わるこの「つつじの太鼓」には、「文禄四未歳」（一五九五年）という銘があります。

例祭では、毎年、この太鼓を台枠しすいに乗せて櫓を立て、五色絹に四垂をつけて飾り立て、渡御行列で、御先太鼓として先頭を進みます。御先太鼓は、馬治地区の氏子が毎年奉仕する慣わしおもてひがきかいせんになっています。

※ お船・表菱垣廻船の模型（桜八幡神社）



つつじの太鼓
〔『庵治町史』から〕

「昭和六十年二月八日、庵治町有形民俗文化財に指定」
おもてひがきかいせん

表菱垣廻船は、格子のように組んだ菱組の飾りが前半だけについているので、こう呼ばれます。通称は千石船、江戸・大坂（大阪）間を定期航海していた大型貨物船で、江戸時代の海運の主力を担っていました。

模型は全長三・六メートル、幅一・〇六メートル、深さ二十七センチ、帆柱の高さ三・一三メートル、舵の長さ一・〇五メートルで、実物の一〇分の一程の大きさです。

船体は鮮やかな朱色の漆塗りで、舳先（船首）^{へさき}や、艫（船尾）^{とも}に螺鈿^{らでん}がちりばめられています。江戸中期の享保年間（一七一六〜三六）に製作され、海上安全を祈願して奉納されたとみられています。出来栄えが素晴らしく、しかも船首の水切りの形などに享保期の古い様式を持つ、日本最古の表菱垣廻船の模型といえます。残存する和船の図面と模型が極めて少ないことから、この桜八幡神社のお船は、和船研究にとって貴重な文化財となっています。

4 願成寺

がんじょうじ

宗派 真言宗高野山派 瑠璃山薬師院願成寺



お船・表菱垣廻船
[『庵治町史』から]

本尊は薬師如来石仏坐像（高さ約七〇センチ）、脇侍に日光月光の二菩薩、さらに十二神将を従えています。本尊の後方に、閻魔大王、淡嶋大明神を祀っています。また、客殿には、大日如来、弘法大師、不動明王を祀っています。

主な建物 本堂、客殿、庫裏、書院、鎮守堂、厨、

鐘楼、梵鐘

由来について、瑠璃山薬師院願成寺縁起（宝暦五年（一七五五）三月、願成寺住職の快宥が記したものの）には、次のように書かれています。

―そもそも願成寺の起興をたずねるに、弘仁五年（八一四）高祖弘法大師、真言密教金剛乘法門を海内に弘通のみぎり、八栗の獄五剣山の麓の里に草庵を結んで薬師堂と号す。すなわち石体薬師の像を安置して、庶人の病難救療を祈る。利益を施すこと至って厚く靈驗日々にいよいよ新なり、道俗崇敬する者甚だ多し、その後草堂焼亡して薬師仏のみ残る―



願成寺の鐘楼



願成寺

また、江戸前期の寛文十二年（一六七二）には、僧宥仙が先人の教えを受け継ぎ、御堂を作って瑠璃山薬師院願成寺と称し、村の人々は、宥仙に帰依して檀家となった、とあります。

なお、この縁起とは別に、「寛文九年（一六六九）、満願寺末寺として願成寺を再興した」という郡の大庄屋からの調査報告が残されています。

※ 祇園社

願成寺の上の丘には祇園さんがまつられ、元治元年（一八六四）の鳥居がありますが、年代不明の灯籠が一對あり、中村与惣〇〇、中村与四郎の字が見えます。また、このお社は鎮守堂ともいい、桜八幡宮旧本尊の阿弥陀如来、皇子権現（皇子神社）旧本尊の観世音菩薩、住吉神社の旧御神代がおまつりされています。この山中の道々には、西国三十三番の観音様がまつられ、巡拝道が作られています。

5 専休寺

宗派 真宗興正寺派 運開山専休寺

本尊 阿弥陀如来木仏立像（高さ四六センチ）



祇園社

主な建物 本堂、鐘楼山門、経堂など。

由来について、専休寺縁起に次のように記されています。

応仁の乱の後、安芸九郎左衛門盛正の子孫が佐伯小次郎

正近を迎え、この真言宗の金光山無量寿寺の住僧にした。

延徳三年（一四九一）、名を隣海と改めた正近は、高野山

に登り五ヶ年の研究修行をする。高野での修行を終えた隣

海は、帰国の道を京都に上り、山科の本願寺で蓮如上人の

教えを聞く機会を得た。御縁によって、直接に蓮如上人の

教えを受けた彼は、お弟子となって善秀と名をいただいた。

一年余りお側に仕えたが、「讃岐に帰って阿弥陀様の御本

願を説き広めよ。」と、上人直筆の六字の御名号を頂戴して帰った。庵治へ帰ると、真

言宗だった寺を真宗に、名も専休寺と改めた。善秀が帰った、真宗に変わったと騒が

れ、法論に明け暮れもしたが、彼に従って真宗に変わる寺も多かった。こうして八十

才を過ぎるまで、門徒と共に念仏を唱え続け、往生をとげた。

明暦二年（一六五六）八月中旬、暴風雨のため寺が大破した。その時、蓮如上人御

筆の六字のお名号が見えなくなった。いくら捜しても見当たらず。ところが不思議な

ことにその翌夜、住職祐善の夢に老人が現われ、「吾れはこの寺の阿弥陀仏である。」



専休寺

と光り輝いているお姿が寺の西南にある榎の枝にお留まりになった。夢から覚めた住職がよく見ると、お名号は無事であった。村人たちは驚いてますます信仰をあつくした。「阿弥陀泊まりの榎」といって有難がられた。

6 辺見城跡

北村に「城の屋敷」という地名があり、戦国時代に庵治七将といわれた辺見源左衛門の城跡とされています。長池の上の畑の辺りで、今もある高い石垣、石垣の下は細く長い堀（長池）などは、城跡と呼ぶにふさわしい外観をなしています。当時、城は辺見城とも庵治城とも呼ばれたといいます。北山の山本家、谷の渡辺家、山田の村井家、原の内の安長家は辺見城の四天王だったといい、長宗我部の兵乱に焼かれて農に帰ったといわれています。

また、鎌倉時代の城跡だともいわれ、専休寺を「城の屋敷」に建てたと書いたものもあり、寺の山際の土塀は城の名残だともいわれています。

四天王だったという家も皆、専休寺の有力な檀家であるため、この城と寺との間に深い関係があったのだらうと思われれます。

7 延長寺

宗派 真宗仏光寺派 弁天山大乘院延長寺

本尊 阿弥陀如来木仏立像

主な建物 本堂、山門、鐘楼など

延長寺の由来は、昔、天台宗の僧で真法という人が、浦の前（または宇賀の前）にお堂を建てて、宇賀の神（弁財天）を祀り、宇賀の坊と呼ばれたことに始まります。永禄年間（一五五八〜七〇）になって、延長寺の住職浄明が、大坂（大阪）本願寺の光佐上人に帰依し、改宗して真宗になりました。

元和四年（一六一八）、初代正景の時に、現在の延長寺の場所に移って浜の坊となりました。三代目法圓は、

高松にある常福寺を復興し、貞亨二年（一六八五）に浜の坊を弟の貞法に譲って、自身は常福寺に移りました。なお、寛文九年（一六六九）の郡の大庄屋の調査には、「讃岐真行寺（真行寺は高松・西浜にある寺）末寺延長寺」となっています。延長寺五代目住職の法勤のとき、真宗仏光寺派に代わりました。そして、七世の法雲の明和年間（一七六四〜七二）に、本堂、庫裡など全部を再建して現在の状態となりました。

宇賀の坊以来、今も境内に弁財天が祀られています。ひたすら阿弥陀仏を礼拝す



延長寺

る真宗の寺院にしては珍しいことです。

※ 弁財天

その昔、天台宗の真法がこの弁財天を祀り宇賀の坊といつてから後、浄明が本願寺の光佐上人に帰依して真宗に変わり、真宗ではただ一向に阿弥陀様だけを祀る宗旨だから、弁天様はどこかに移っていたことになりました。弁天様は川の神様、船の神様でもあり、海の神様でもある、と、荒浜の皇子権現さんの境内に移されました。さて、移してお祭りしたのですが、弁天様はどうしたのか「浜へ帰りたい。浜へ帰りたい。」と毎夜お泣きになります。権現さんの近くの人はその声を聞いたといい、弁天様の泣いているお顔を夢に見たともいいます。浜の人々は延長寺の住職に頼んで、境内に弁天様をお祭りすることになりました。阿弥陀様におすがりして後世の安樂を願うとともに、弁財天をお祭りして現世の利益もお祈りすることになったのです。

8 荒神社（谷の荒神さん）

荒神は、三宝荒神の略で、本来は仏教の三宝（仏、法、僧）を守る神です。怒りを



境内の弁天堂

あらわにした相で、三つの顔と六つの腕を持ちます。東日本では、主に、火の神、かまどを守る神とされますが、西日本では、多くが、屋敷の神、土地の神、村の神として祀られています。

谷の荒神さんは、荒神屋敷として除地（*江戸時代、領

じょち

主により年貢免除の特権を与えられた土地。よけち。）の水夫屋敷に挟まれていながら除地の中に入っていないせん。土地の神、部落の守り神としての荒神さんで、それに金毘羅さん、地藏さん、前には恵比寿様も祀られていました。

すぐ裏山の藪の中などから昭和初年に発見された小五

輪塔、光背付きの地藏墓など三十体が集められ、祀られて

います。屋根形の墓も残っており、屋島合戦の戦死者の墓だとも言い伝えられています。

※ 五劫思惟の阿弥陀さん（谷の荒神社の石仏）

ごこうしゆい

「昭和六十三年一月二十七日、庵治町有形文化財工芸品に指定」

苦行時代の阿弥陀様の様子（阿弥陀如来が四十八願を建立する前に、五劫という途方もない永い時間修行をし、裸でやせ細って骨ばかりになり、立て膝で頬杖をついて



荒神社（谷の荒神さん）

じつと考えている様子）を表した石仏です。材料は庵治石（中目）で、この荒神社に
ベ柱を寄進している人の兄か叔父に当たる人（丸山の石工）の作と言われ、作られて
から百年もたたない新しい物ですが、肋骨、手、足など、細いこまやかな彫刻がなさ
れ、大変珍しい立派なものです。

9 岩座 いわくら 番外編

大仙山の頂上に高さ二メートル五十センチ、周囲が四メートルもある長い石が立っ
ています。これは伊勢の朝熊山に立っているものに次ぐ大きいものだといいます。ま
た、御殿山には三つの大きい岩が、ある一定の間隔に据えられていて、どちらも神々
のお降りになる岩、宿られる岩で岩座いわくらといえます。

大昔の人々がその土地に來ると、山の上に神を祭る場所を造りました。岩座を造る
ことは、「ここら是我々のものだ。」というしるしでもありました。だから、最初にこ
こへ來た人たちが、力を合わせて岩いわしろを立て、並べたりしたものです。大仙山の頂上に
は他にも大きい岩があつて岩城いわしろとも言えそうな形です。

石はいつまでも変わらず動かず、堂々として重みがあり力があり、さらに大きく成
長する不思議な力の持主、即ち、神として祭られ、神の座席としても尊ばれました。

こうした信仰は、満州や朝鮮、出雲にも伝わっているもので、出雲から岡山、島々を通じて四国にまで移って来た大陸文化が、この大仙山や御殿山の岩座であるということです。そして、これが立てられたのは四千年ほど昔で、庵治は四国文化の発祥の地だろうと小谷冠桜氏の『屋島古城』には記されています。

10 皇子神社

うじのわきいらつこのみこと

祭神 宇治稚郎子命

主な建物 本殿、幣殿、拝殿など

おおくにぬしのみこと

境内神社 金毘羅神社 祭神

大国主命

しんめい
長田神社

祭神 事代主命

神明神社

祭神 天照大神（一説には、竜王神も祀る）

王の下地区にあり、郷社・桜八幡神社の境外摂社で、皇子権現または皇神宮とも呼ばれます。元和六年（一六二〇）に、庵治村の又左衛門によって、海上の守り神として再興されました。社殿は、初め、江の浦の海浜にありました。庵治の御殿に静養に来る高松藩祖・松平頼重も参拝したといわれ、その縁から現在地に移され、社殿が改築されています。

『讃岐国名勝図会』には、陰暦六月十五日の日没時から神幸祭（現在の夏祭）が行

われるが、神輿みこしは、皇子山上から江の浦海岸へ、そこから更に対岸の新開の浜に渡御される。海には数百の拝観船が浮かび、その景色はとても厳かである。深夜になって、神輿は元に戻る、と記されています。

【参考文献】

『庵治町史』

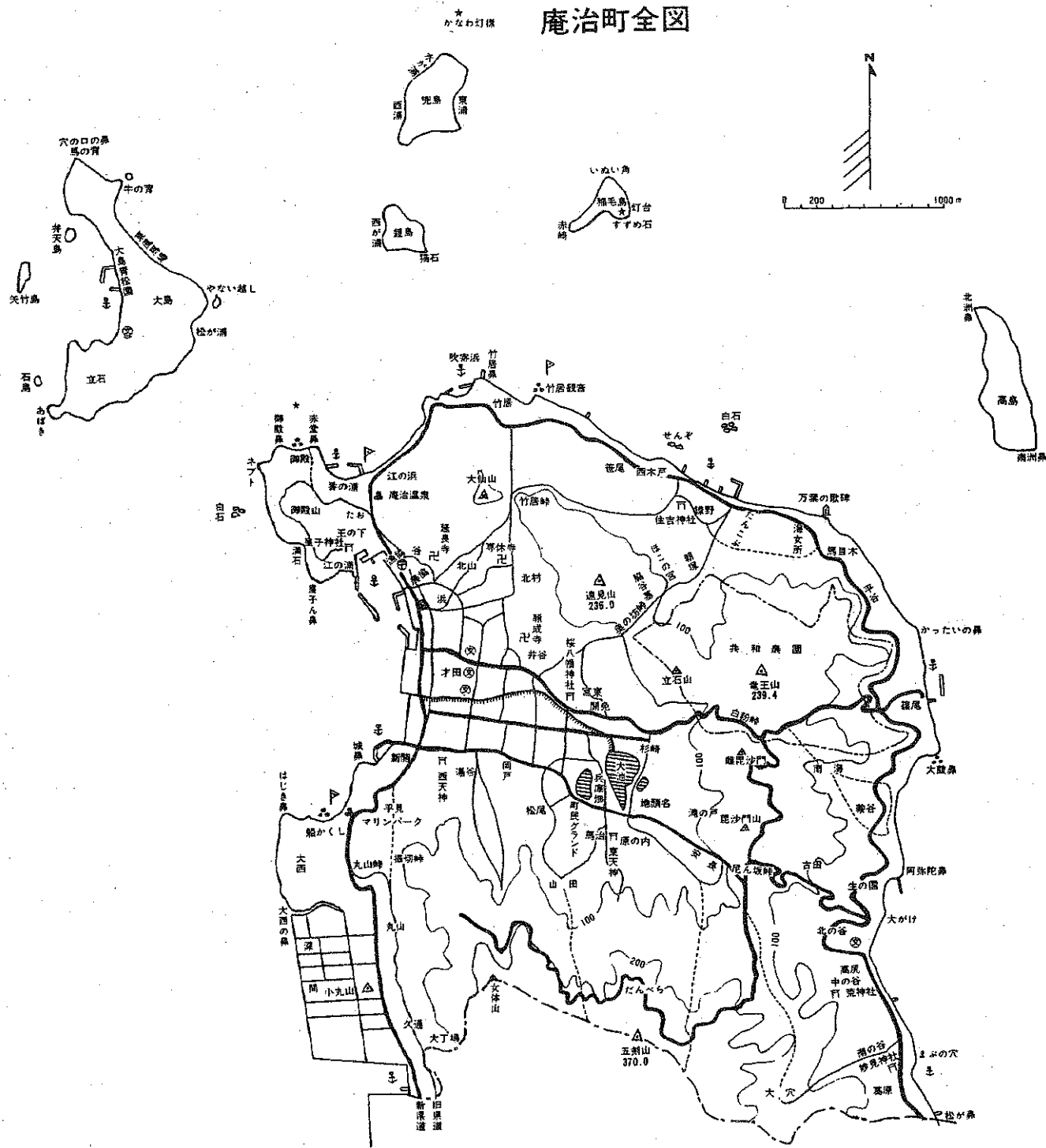
平成十九年三月三十日発行 編集 発行 高松市

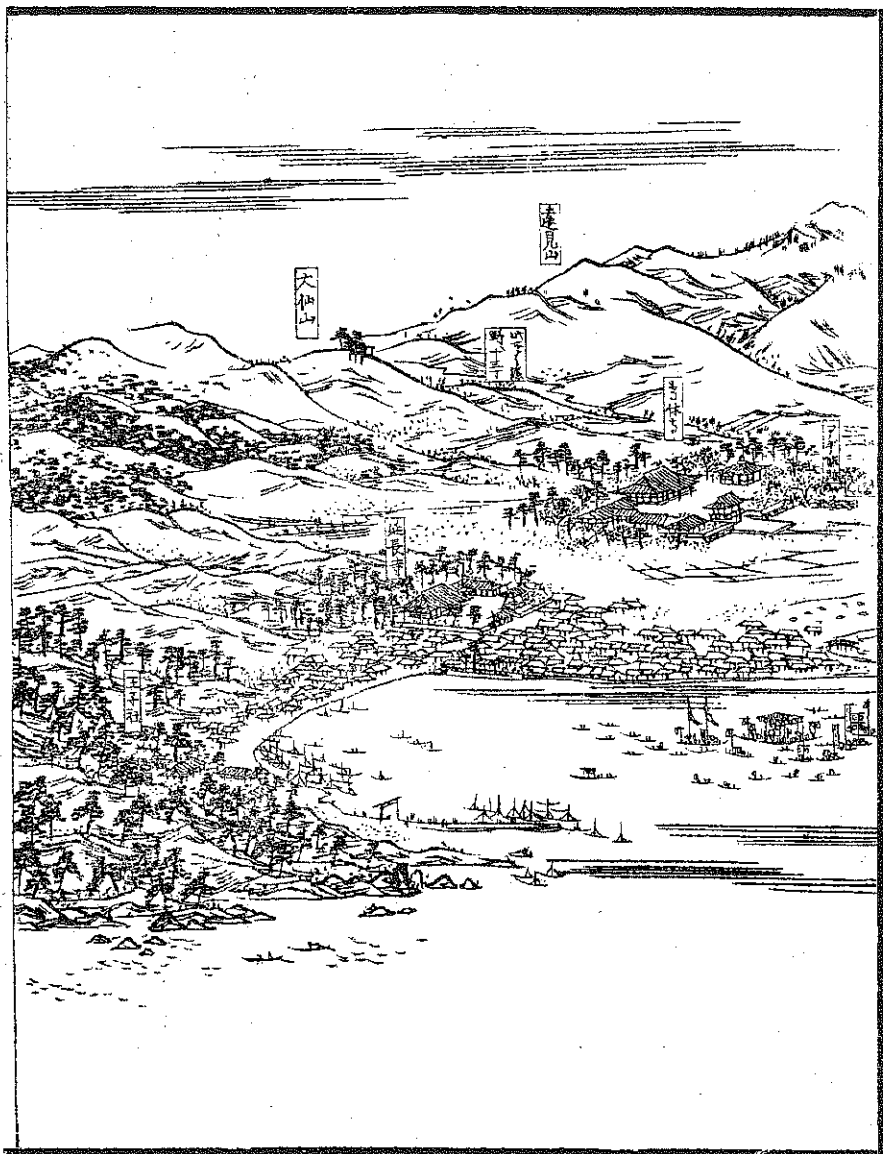
『史跡探訪』

平成十九年九月三十日・平成十九年十月十四日・平成十九年十一月

十一日 (いづれも) 庵治公民館主催

庵治町全図







11月27日（日） 庵治町からの復路

ことでんバス 【74 瓦町・高松駅行き】

（庵治農協前バス停） （瓦町・天満屋バス停）

12：17 発 → 12：56 着

13：17 発 → 13：56 着

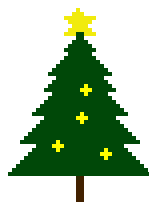


次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 法然寺から船岡山古墳へ

とき 平成23年12月18日（日）

9：30～12：00



集合場所 香川県農業試験場(仏生山町甲 220)の南隣
（琴電仏生山駅から西へ徒歩1分）

講師 船築 紀子（高松市文化財専門員）

☆広報「たかまつ」12月15日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆天候等により中止の場合のみ文化財課（TEL 839-2660
「午前7時～開始時間まで」）でお知らせします。
（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★集合場所への交通案内★-----

ことでん電車【琴平線】

（瓦町駅） （仏生山駅）

8：50 → 9：03

9：05 → 9：18

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず、歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。